明治国際医療大学誌　12 号：23-26，2015
© 明治国際医療大学

精神科スーパー救急病棟における精神看護学実習に対する看護師の思い

川村　晃右 *1)，山本　明弘 2)

1) 明治国際医療大学看護学部看護学科，2) 京都看護大学看護学部看護学科

要　旨

【目的】本研究では，精神科救急入院料病棟（以下，精神科スーパー救急病棟）の看護師の精神看護学実習に対する思いを明らかにすることを目的とする．

【方法】A 病院精神科スーパー救急病棟で勤務する看護師 15 人（回収率 60%），男性：7 人，女性：8 人，平均年齢：35.9 ± 9.2 歳，平均看護師歴：10.5 ± 7.8 年，平均精神科病棟勤務歴：6.3 ± 6.0 年に対して，精神看護学実習に対する認識などを自由記述で尋ねる無記名自記式質問紙調査をおこない，留置法により回収した．集まったデータについては内容分析を参考に分類した．

【結果】精神看護学実習に対する思いについて，32 のコードが抽出された．そこから 9 サブカテゴリ，《患者の精神症状悪化につながる恐れ》《学生のかかわりにより治療が中断してしまうことへの懸念》《精神看護に関心をもつことへの期待》《学生のかかわりも患者への治療の一部》の 4 カテゴリが生成された．

【考察】今後，実習を展開させていくためには，学生の学習効果を保ちながらも，自身のかかわりにも治療的意味合いがあることを学生自身が認識していけるように，看護師と教員が協同し教育していく必要性のあることが示唆された．

Key words　精神科スーパー救急病棟 psychiatric emergency ward，精神看護学実習 psychiatric nursing practice，思い thought

Received August 28, 2014; Accepted February 12, 2015

I.　はじめに

近年，地域精神医療が推進されるに伴い，精神科救急医療体制の整備が求められている．そして，2002 年には精神科スーパー救急病棟が動き始めた．そこで従事する看護師は，これまでの精神科急性期看護の経験を駆使しながらも，日々，試行錯誤を繰り返しており，治療的介入を確立することは喫緊の課題であるといわれている [1]．

しかしながら，急性期にある患者は，症状の辛さに加え，強制的な治療による苦痛を感じている場合も多く，関係性の構築が難しい [2]．さらに，学生は人間関係をつくる上でのコミュニケーション能力も不十分なため [3]，精神症状が比較的安定している慢性期や回復期にある患者とのかかわりを精神看護学実習の対象としていることが多い．そのため，実習指導の在り方についての研究も [4-6]，精神科スーパー救急病棟での実習に関連した研究報告は未だない．本学では，2013 年度より精神看護学実習を精神科スーパー救急病棟で実施している．実習の柱となる目標はこれまでと同様，人間関係構築のプロセスを自己洞察しながら学習することである．その目標達成において，より繊細な対応が必要とされ，関係の構築が難しい急性期患者とのかかわりこそが学生の自己洞察を促進することもある．そして，自己洞察の促進には，看護師との綿密な調整が必要となる．なかでも，学生は看護師の経験談など実践に即した教授方法を希望しているといわれ [7]，病棟の看護師から受ける指導は学生の学びに直結するため，看護

* 連絡先：〒 629-0392　京都府南丹市日吉町保野田ヒノ谷 6-1
明治国際医療大学看護学部看護学科
E-mail: k_kawamura@meiji-u.ac.jp

The Bulletin of Meiji University of Integrative Medicine

師の実習に対する思いを反映していくことは重要である．そこで，本研究では，精神科スーパー救急病棟の看護師の精神看護学実習に対する思いを明らかにすることを目的とする．看護師の思いが明らかになることは，実習展開における効果的な教育方法を検討していく際の基礎的資料となるものと考える．

II.　研究方法

1. 研究デザイン

探索的帰納的な質的研究法とする．

2. 調査期間

2014 年 3 月～ 4 月に実施した．

3. 対象

A 県の精神科病院（病床数 562 床，うち精神科スーパー救急病棟 51 床）の精神科スーパー救急病棟の看護師 25 名を対象に質問紙を配布し，研究協力の同意を得られた 15 人（回収率 60%），男性：7 人，女性:8 人，平均年齢:35.9 ± 9.2 歳，平均看護師歴:10.5 ± 7.8 年，平均精神科病棟勤務歴：6.3 ± 6.0 年とした．

4. データ収集方法

精神科スーパー救急病棟で精神看護学実習を展開していくことに対する認識，配慮していること，実習内での指導についての考えなどを自由記述で尋ねる無記名自記式質問紙調査をおこない，留置法により回収した．

5. 分析方法

Berelson，B の内容分析の手法を紹介した舟島の著書[8]を参考に，精神科スーパー救急病棟での精神看護学実習についての看護師の思いについて表現されている文脈単位を分析対象とした．それを要約してコードとし，類似性に沿ってまとめ，そのサブカテゴリ，カテゴリの概念を表す名称つけるといった質的記述的な分析をおこなった．そして，生成されたカテゴリの傾向から，精神科スーパー救急病棟での精神看護学実習についての看護師の思いの本質について明らかにした．

なお，分析に関しては精神看護および質的研究の熟練者によるスーパーバイズを受けることで妥当性を担保した．

6. 倫理的配慮

本研究は，明治国際医療大学研究倫理委員会の承認（承認番号 25-99）を得た後，本研究の主旨を文書において説明し，回答および提出されたことをもち研究への同意が得られたものと判断した．

III.　結果

精神科スーパー救急病棟での精神看護学実習実施に対する思いについて分析した結果，32 のコードが抽出された．そこから 9 のサブカテゴリ，4 のカテゴリが生成された（表 1）．

〈学生が精神症状の対象とならないか不安〉〈学生のかかわりによる精神症状悪化が心配〉のサブカテゴリから《患者の精神症状悪化につながる恐れ》が生成された．〈学生による治療の妨げを懸念〉〈患者の治療過程の理解が必要〉のサブカテゴリから《学生のかかわりにより治療が中断してしまうことへの懸念》のカテゴリが生成された．〈急性期患者という特性の理解が必要〉〈精神看護への魅力を感じとってもらいたい〉〈学生個々の学びを深めてほしい〉のサブカテゴリから《精神看護に関心をもつことへの期待》のカテゴリが生成された．〈学生は患者の様々な側面の表出を促す存在〉〈学生の傾聴姿勢への期待〉のサブカテゴリから《学生のかかわりも患者への治療の一部》のカテゴリが生成された．

IV.　考察

鈴木ら[9]は，精神看護学実習指導者の指導観の形成要因についてまとめており，その中には学生の学習意欲形成を促す態度，学生の心のサポートなどの要因があると述べている．本研究における《精神看護に関心をもつことへの期待》は，学生が精神疾患患者を多角的に捉えることにより，学習意欲の向上へとつなげようとしている思いである．そして，急性期患者の刺激への適応の弱さを理解してほしいなどの，救急病棟ならではの学びをしてほしいといった思いが付与されている．一方で，福井らの研究[10]のなかには，患者に関する困難といったカテゴリがあり，患者の疲労や症状悪化につながることへの懸念を述べている．本研究においてもそれに準じた《患者の精神症状悪化につながる恐れ》という実習受け入れに対する不安な思いが明らかになった．さらに，《学生のかかわりにより治療が中断してしまうことへの懸念》といったカテゴリが生成されたことは，精神科スーパー救急病棟での実習において，入院期間が 3 ヶ月と限局されていることが影響し，治療の中断に対する不安な思いが強く表出されているのだと考える．

表 1　精神科スーパー救急病棟での精神看護学実習実施に対する看護師の思い

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
患者の精神症状悪化につながる恐れ	学生が精神症状の対象とならないか不安	学生が妄想対象となることへの不安がある
		学生が患者の疾病の経過を知らずにかかわることで言動に巻き込まれることがある
		精神症状の不安定さから暴力を受けたり妄想対象とならないように注意が必要である
	学生のかかわりによる精神症状悪化が心配	精神症状が不安定な患者もいるため注意が必要である
		患者によっては学生のかかわりが刺激となり症状が悪化してしまう
		学生のかかわりで患者が調子を崩される心配がある
		学生の何気ない一言が患者への刺激となり症状に影響する可能性がある
		辛い闘病のなかで学生がかかわることは辛さを助長してしまう可能性がある
		対人関係の構築が苦手な患者もいるためかかわりにより症状の悪化が考えられる
学生のかかわりにより治療が中断してしまうことへの懸念	学生による治療の妨げを懸念	学生がかかわり過ぎることで患者の依存性を高めてしまう可能性がある
		看護師が一貫した治療的な対応を心がけている患者もいるため学生のかかわりが心配
	患者の治療過程の理解が必要	学生は患者の入院経過を知らないため支援が必要である
		入院している患者が退院するまでの一連性を感じてもらうことが必要である
		互いの関係性を保つためにも患者との距離感を考えてかかわってほしい
精神看護に関心をもつことへの期待	急性期患者という特性の理解が必要	慢性期病棟との違いを考えながらかかわって欲しい
		急性期患者の特性をコミュニケーションや情報から学んでいくことができる
		急性期病棟である特殊的な部分を理解してもらいたい
		急性期患者は活動と休息のバランスが大切で刺激への適応の弱さを理解してもらいたい
	精神看護への魅力を感じとってもらいたい	精神看護の難しさと面白さを感じれるような指導をしたい
		精神科への怖さをもった学生が面白さを感じれるように支援したい
		患者は怖いなどといった誤った認識をもっていることに気付けるように交流を促している
		寄り添い対話するなかで精神科患者は怖いといった認識を変えていってほしい
		様々な精神疾患の患者とかかわることで疾患の身近さを感じて欲しい
	学生個々の学びを深めてほしい	学生が集まって実習時間を過ごすことのないように患者の近くに導いている
		学生同士で集まってしまう気持ちは分かるが単独で実習に臨み学びを深めてほしい
		学生が何か違和感を感じた時は何でも看護師に伝えてほしい
学生のかかわりも患者への治療の一部	学生は患者の様々な側面の表出を促す存在	学生は患者の色んな側面を引き出すため病棟が華やかになる
		患者が学生とのコミュニケーションやレクリエーションを通して気分転換できている
		学生とのかかわりが患者にとっても良い刺激となり感情の表出が増すこともある
		患者が学生とかかわることで退院後の社会生活の練習になる
	学生の傾聴姿勢への期待	患者の学生へのかかわりで看護師には言えない気持ちを表出することがある
		患者にとって学生は話を聞いてくれる存在となっている

このように，本研究で調査した精神科スーパー救急病棟の看護師は，精神看護学実習に対してこれまで明らかになってきていることと同様の思いと，救急病棟であるからこその懸念をもっていることが明らかになった．また，臨床現場における実習が患者や学生にどのように影響するかの予測が難しいという不安が内在していることが推察される．精神科スーパー救急病棟での看護実践を卒後の自己啓発の一環として報告する研究もあり[11]，看護師にとって精神科スーパー救急病棟での看護の経験は，卒後教育のなかでおこなうといった認識も強く，ジレンマが生じているのではないかと考える．

一方，看護師はジレンマをもちながらも，《学生のかかわりも患者への治療の一部》としており，学生のかかわりに治療的な側面を捉えていた．これまでも，学生が実習のなかで患者に対し効果的なコミュニケーションやかかわりをもつことが出来たという認識をもっていることがいわれている[12]．精神科では，かかわりそのものに治療的な意味合いをもつため，看護師も学生のかかわりを重要視し，治療につなげていることが考えられる．

今後，実習展開していくなかでは，学生の学習効

The Bulletin of Meiji University of Integrative Medicine

果を保ちながら，かかわりに治療的意味合いがあることを学生自身が認識していけるような教育が望まれる．また，村松ら[13]は，臨地実習の教育効果について，指導者側も教員側も，互いの連携を強化する必要性を強く感じているとしている．臨地実習指導者と担当教員の指導の連携は，学生の実習目標到達に重要かつ不可欠であり，綿密な連携をとり実習を展開させていくことにより，看護師が感じている懸念の軽減を図っていく必要があると考えられる．

V.　研究の限界と今後の方向性

本研究は，対象が一施設の看護師であり，一般化するには限界があるため，今後，信頼性を高めていく必要がある．また，本研究は，精神看護学実習の展開につなげるための一資料であり，得られた結果をふまえて実習を展開, 評価していく必要性がある．

VI.　結語

本研究により，精神科スーパー救急病棟における精神看護学実習に対する看護師の思いを分析した結果，32 のコードが抽出され，そこから 9 サブカテゴリ, そして《患者の精神症状悪化につながる恐れ》《学生のかかわりにより治療が中断してしまうことへの懸念》《精神看護に関心をもつことへの期待》《学生のかかわりも患者への治療の一部》の 4 カテゴリが生成された．精神科スーパー救急病棟での精神看護学実習は，急性期にある患者とのかかわりが増えるため，症状の悪化や治療の中断といった懸念が，他病期の病棟での実習より大きいことが推察された．しかしながら，看護師は学生のかかわりをも重要視し，治療につなげていることが考えられる．今後の実習展開には, 学生の学習効果を保ちながらも，学生自身のかかわりにも治療的意味合いがあることを学生が認識していけるように看護師，教員が協同し教育していく必要があることが考えられた．

謝　辞：本研究にご協力いただきました看護師の方々に厚く御礼申し上げます．なお，本研究は，平成 26 年度明治国際医療大学学内研究助成により実施した．

文　献

1. 東修：精神科救急医療における看護実践のプロセス．北海道医療大学看護福祉学部学会誌，7(1): 65-69, 2011.
2. 小宮浩美，岩崎弥生：精神科急性期における患者―看護師関係に関する研究；援助場面への参加観察を通して．千葉看会誌，15(1): 59-67, 2009.
3. 日下知子，曽谷貴子，揚野裕紀子：精神看護学臨地実習における看護学生のとらえに関する研究；精神科看護師の実践過程の内容分析．川崎医療短期大学紀要，27: 13-18, 2007.
4. 酒井美子，土肥しげ子，松井淳子：精神看護学実習指導の検討；学生の記述による学びの分析から．桐生短期大学紀要，17: 175-180, 2006.
5. 中野あずさ，益子育代，田村文子：精神看護学実習の「患者―学生」関係における困惑を改善するための指導方法の研究．群馬県立県民健康科学大学紀要，1: 51-62, 2006.
6. 川村道子，小笠原広実，阿部惠子：精神看護学実習における学生の認識の発展を促す指導に関する研究．宮城県立看護大学研究紀要，7(1): 32-44, 2007.
7. 小野晴子，岡本亜紀，土井英子ら：精神看護学実習における学生―患者間の「距離」に関する研究．新見公立短期大学紀要，28: 7-13, 2007.
8. 舟島なをみ：質的研究への挑戦，2，医学書院，東京，pp 40-79, 2007.
9. 鈴木みわの，青木実枝：精神看護学実習指導者の指導観を形成する要因．山口保健医療研究，10: 29-39, 2007.
10. 福井美貴，末安民生，野末聖香：精神看護学における臨床実習指導者の抱える困難；大学教育に焦点を当てて．日本精神保健看護学会誌，14(1): 88-97, 2005.
11. 竹谷克巳：攻撃行動のある患者への感情を言語化するアプローチ；ペプロウの看護理論を用いた看護過程の分析．日本精神科看護学会誌，51(2): 324-328, 2008.
12. 谷本千恵，松田静子，北岡和代：精神看護学実習における看護場面の再構成による学生の学び．石川看護雑誌，3(2), 2006.
13. 村松仁，吉川由希子，藤田あけみら：看護学教育における実習施設との連携に関する研究第 1 報；教員の実習指導体制について．日本看護学教育学会誌，14: 87, 2004.